

# 人文学に《信念》は必要か？——フィクション論からの視点

河田 学 (京都精華大学非常勤講師)

## 1. 信念・世界・フィクション

### 1.1 素朴心理学folk psychology的概念としての信念

- ・素朴心理学 v.s. 認知科学

### 1.2 信念と信念／虚構世界

- ・サリーとアンの実験 (Wimmer & Perner 1983; Baron-Cohen & Leslie 1985)
- ・エコによる「とてもパリの物語」の分析 (Eco 1984)  
——5つの可能世界、 $W_N$ ,  $W_{Nc}$ ,  $W_R$ ,  $W_{Rc}$ ,  $W_{Rcc}$

新婚早々のラウルとマルグリットは互いに嫉妬深く、喧嘩を繰り返すがすぐに仲直りをする。(第1～3章) ある朝ラウル、マルグリットそれぞれのもとに、相手が「ごきげんな」*en belle humeur* ところを見たいと思うのであれば、木曜日の仮面舞踏会にいきなさいと伝える手紙が届く。手紙によればラウルは聖堂騎士団員に、マルグリットはコンゴの丸木舟に仮装しているはずであるという。二人が互いに口実を作るところで、仮面舞踏会のシーンに物語は転じる。(第4章) 仮面舞踏会では午前三時に聖堂騎士団員がコンゴの丸木舟を夜食に誘う。(第5章) レストランの個室で聖堂騎士団員は、自らの仮装を取り、そして丸木舟の仮装をはぎ取る。しかし男はラウルではなく、女はマルグリットではなかった。「同時に、二人とも、驚きの声を上げた。お互い見たこともない顔だった。」(第6章) ラウル、マルグリットが「このちょっとした災難」を教訓として幸せになったことを告げ、テキストは幕を閉じる。(第7章)

$W_R$ : 読者が思い描く可能世界	$W_{Rc}$ : 登場人物たちが思い描くものとして読者が想定する可能世界	$W_{Rcc}$ : 登場人物が思い描いているものとして他の登場人物が思い描いていると読者が想定する可能世界
R <sub>6</sub> : 聖堂騎士団員に扮したラウルは自分の愛人と出会ったが誤ってZ <sub>3</sub> を信じている	Z <sub>3</sub> : 丸木舟はマルグリットである	
R <sub>7</sub> : 丸木舟に扮したマルグリットは自分の愛人と出会ったが誤ってZ <sub>4</sub> を信じている	Z <sub>4</sub> : 聖堂騎士団員はラウルである	
R <sub>8</sub> : それぞれ聖堂騎士団員、丸木舟に扮したラウルとマルグリットが出会ったが、二人はそれぞれZ <sub>5</sub> 、Z <sub>7</sub> を信じている	Z <sub>5</sub> : 丸木舟に扮したマルグリットはZ <sub>6</sub> を信じている Z <sub>7</sub> : 聖堂騎士団員に扮したラウルはZ <sub>8</sub> を信じている	Z <sub>6</sub> : 聖堂騎士団員はマルグリットの愛人である Z <sub>8</sub> : 丸木舟はラウルの愛人である

### 1.3 志向的／様相的文脈の不透明性

- ・指示の不透明性

- ジョージ4世は、スコットが「ウェイヴァリー」の作者なのだろうかと考えた。(Russell 1905; Dennett 1987)

- バージェスは、藪のなかでカサカサ音を立てている生き物がニシキヘビではないかと恐れている。(Dennett 1987)

- 9が7よりも大きいことは必然的である。(Quine 1980)

## 2. フィクション論における信念

### 2.1 フィクションのパラドクス

1. ある人々（感情主体emoterと呼ぼう）はときとして自分が虚構だと考えている人物や状況にたいして感情を経験する。

2. いかなる人であれ、感情を経験するのは、自分の感情の対象が存在しかつその感情に特有の感情誘発属性emotion inducing propertyの少なくともあるものを有していると自分で信じているときのみである。

3. 自分の感情の対象が虚構であると考えているどのような感情主体も、自分の感情の対象が存在し、何らかの感情誘発属性を有しているとは信じていない。(Yanal 1999)

### 2.2 ラドフォードの議論——不合理なものとしての感情

われわれが何らかの方法で芸術作品に心を動かされるということは、われわれにとってとても「自然」でありその意味ではあまりにわかりやすいことである反面、われわれを矛盾inconsistency、不整合inconherencyに巻きこむことでもある。(Radford 1975)

### 2.3 パスキング、マコーミックらの議論——現実の対象に対する感情

クンデラの小説 [『存在の耐えられない軽さ』を指す] を読んでわれわれが信じることになることからの一部分は、例えばトマシュの同情に似た何らかの現実の行動が道徳的に意味のあるものだということである。(McCormick 1985)

### 2.3 ウォルトンの議論——感情emotion／疑似感情quasi-emotion

彼 [チャールズ] はほんとにそれ [スライム] を恐れているのだろうか。私はそうではないと考える。チャールズの状況は、いくつかの明らかな点において、今起こりつつある現実の災難に恐怖する人間のそれに似ている。筋肉は張りつめ、椅子にしがみつき、脈も速くなり、アドレナリンが湧きでてくる。この生理学的心理学的状態を、疑似恐怖quasi-fearと呼ぶことにしよう。しかしこの状態は、それ単体で真の恐怖genuine fearを構成するものではない。(Walton 1990)

### 2.4 テーゼ2は必要か？

・ 指示の問題との同型性

——ラッセルの記述理論とそのフィクション論への影響

- 現在のフランス国王は禿である。[The present king of France is bald.]

- 「現在のフランス国王」である x が存在し、「現在のフランス国王」であるいかなるものもそれは x と同一であり、その x は禿である。

-  $\exists x (Fx \wedge \forall y (Fy \supset y=x) \wedge Bx)$

・ 人文学研究への示唆

□参考文献

- Baron-Cohen, S., Leslie, A.M., and Frith, U. 1985. "Does the Autistic Child Have a 'Theory of Mind?'" *Cognition*, 21, 37-46.
- Dennett, D. 1987. *The Intentional Stance*. MIT Press.
- Eco, U. 1984. *The Role of the Reader: Explorations in the Semiotics of Texts*. Indiana University Press.
- McCormick, P. 1985. "Feelings and Fictions." *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 43, 375-383.
- Radford, C. and Weston, M. 1975. "How Can We Be Moved by the Fate of Anna Karenina?" *Proceedings of the Aristotelian Society*, supp. vol. 39, 67-93.
- Russell, B. 1905. "On Denoting," in Marsh, R. C. ed., *Logic and Knowledge*. 1988, Allen and Unwin.
- Quine, W. V. O. 1980. "Reference and Modality," in *From a Logical Point of View*, Second ed. Harvard University Press.
- Walton, Kendall. 1978. "Fearing Fictions." *The Journal of Philosophy*, 75, 5-27.
- . 1990. *Memisis as Make-Believe: On the Foundations of the Representational Arts*. Harvard University Press.
- Wimmer, H. and Perner, J. 1983. "Beliefs about Beliefs: Representation and Constraining Function of Wrong Beliefs in Young Children's Understanding of Deception." *Cognition*, 13, 103-128.
- Yanal, Robert J. 1999. *Paradoxes of Emotion and Fiction*. Pennsylvania University Press.